週報
こひつじ
第39巻　20号
大津キリスト教会
菊池郡大津町室 119
TEL 096-293-4470
FAX 096-293-4961
牧師　米村　英二

イエスの処方箋

その二　行動の促し

「よくなりたいか」

の言葉にその病人は反応した。そしてイエスをじっと見つめた。やがて彼のうちに意欲が芽生えるのを見て、イエスは言われた。

「床を取り上げて歩け」

すると彼は歩き始めたのである。単純な行動の促し。これが三番目のイエスの処方箋だ。

イエスの最後の命令は常に「行動せよ」だった。

人は、行動する前に熟考する。しかし熟考は行動ではない。それは何一つ変えない。何一つ創造しない。その病人は三八年間も、ただ考え続けていたのだ。だがそれは何の変化も彼に与えなかった。

イエスは行動を求められる。

頭の中で、朝、もう起きなければならないと思っているだけでは、依然としてベッドの中だ。どうせ起きなければならないのなら、思い切ってふとんをはねとばさなければならないのである。

くよくよ悩んでいても、何も起こらない。繰り返すようだが、変化を起こすのは行動であり、行動だけなのだ。

高校を卒業して大阪のシャープという会社に入ったときだった。与えられた仕事がいやで、憂鬱な日々を送っていた。

やる気のない私に向けられる係長の目はきびしかった。それがいっそう私を重い気分にさせた。

そんなときに大きな失敗をした。検査中の部品を大量に激しい音とともに床に落としてしまったのだ。

「何をやっている！」

大勢の前で係長の怒号が飛んだ。床に落ちた部品を拾いながら、その罵声を聞き続ける。みじめだった。立ち上がって、まわりの人を見る勇気はなかった。その日の仕事が終わるまでの時間が、あれほど長く感じられたことはない。

その夜のことだ。翌日、会社へゆくことを考えると、気が重く、ほとんど恐怖に近いものを感じていた。今でいう不登校傾向だ。やめて九州に帰りたい気持ちにかられた。

が、そのとき思った。確かに私は、大切な部品を壊して、会社に迷惑をかけたのではないか。そのことを係長に謝罪しよう。ゆるしを乞おう。

その晩に社宅に向かった。係長宅はすぐに見つかった。勇気を奮い起こして玄関のベルをビーッと押す。出てきたのは係長だった。私を見てびっくりされたようだった。私は頭をさげて、その日の自分の不注意をわびた。すると、

「いや、私こそ、みんなの前でみんな叱り方をして、ほんとうにすまなかった。まあ、ともかくあがりたまえ」

という係長の意外な反応に私は驚いた。奥様のもてなしを受けながら、会話がはずんだ。

「そうか君は、熊本か。ぼくは佐賀だ」

おなじ九州出身であることもわかり、それからは、わだかまりもなくなった。むしろ好意を持って接してくれるようになった。

そのとき私は学んだ。打開の道は何事においても正直であること。そしてそのために思い切って行動をとることだと。（続）

****

今日の礼拝

○第一礼拝は午前一〇時から、第二礼拝は午前一一時から。

○教会学校は午前一〇時からこひつじ館で。

○説教は米村牧師。

先週の礼拝

○司会は西岡潤也さん。
○証は屋宜和成さん。
和成さんは長く熊本の化血研で働いておられましたが、そこを退職し、今後は、千葉に本社のある製薬会社の福島工場で、彼に任された重要な仕事をされるそうです。遠くにゆかれるのはさびしいですが、ぜひとも良い仕事をして、社会に貢献していただきたいと思います。でも月に一度は帰ってきてくださるそうで、うれしく思います。
○アメリカからめずらしいゲストがありました。国際交流員として五年間、大津町で働いていたマシューさんです。日本滞在中は、いつも私たちの教会の礼拝でバイオリンの演奏や賛美をしてくださっていました。それで突然でしたが、お願いしたら、「おどろくばかりのめぐみなりき」など二曲を、吉岡さんの伴奏で歌ってくださいました。とても感動的でした。

先週の出席

第一礼拝が四四名、第二が四〇名、合計八四名(男三一、女五三)。子ども六名。合わせて九〇名。

報　告

○こひつじ館の庭の塀の補修及び楓の木の剪定を山村夫妻が先週やってくださいました。感謝です。
○『こひつじＪｒ』第一四号が発行されました。今回の「あの人インタビュー」は興梠みゆきさんです。毎月一回発行し、若い方々に発送されています。

牧師身辺

毎朝七時の祈り会では讃美歌を一曲うたって始めるのですが、なぜか私が選ぶことになっています。うたったら、その番号をノートに記します。
この数ヶ月でうたった曲の数を数えたら、全部で六三曲でした。たった一回だけうたった歌もあれば、二回、三回とうたった歌もあります。そのなかで一番多かったのは聖歌の二九八番で、七回もうたっていました。とくに意識しないで選んでいたのですが、きっと何か私の心に響くものがその歌にはあったのでしょう。その歌詞を紹介します。

世にあるかぎり　仕えまつらん
この身に近く 主よましませ
戦いもなど　恐るべしや
導く御手に　すがりゆく身

原詩は、John E. Bode (1869)の作です。自分の子どもたちが洗礼を受けるときに作ったものだそうです。原詩を、自分なりに訳してみました。

おおイエスよ、
私は約束しました。
終わりの日まで
あなたにお仕えすると。
とこしえに
私のそばにいてください。
あなたは私の主であり、
友なのですから。
もしあなたが
そばにいてくださるなら、
私は決して戦いを恐れません。
もしあなたが
私の導き手であるなら、
どうして道を
外れることがありましょう。

いかがでしょう。皆さんにとってもいい讃美歌でしょうか。